

# ジャズとクラシック音楽

徳備 康純

## 1) ジャズの登場

19世紀末、南北戦争が終わったアメリカ南部に「解放」された黒人たちが溢れていた時代、アフリカを起源とする彼らの民族音楽をベースとして、ブルースやラグタイムといった音楽が生まれ、アメリカで流行し始めた。

アフリカ(主に西アフリカ、西サヘル辺りと言われるが)の地域の音楽と、ヨーロッパからの移民たちが持ち込んだ賛美歌や軍楽隊の行進曲などがベースとなって生まれたと言われている。

ラグタイムは1897年頃から1918年にかけて世界的に流行した。

ストラヴィンスキーをはじめ多くのクラシカルな作曲家たちも、このアメリカからやって来た新しい音楽の様式を取り入れて「ラグタイム」を書いているのも、大体この時期のことであった。

シンコペーションを多用したメロディーと、マーチ風の伴奏が特徴のこの音楽は、主にピアノで演奏される。

Not fast

スコット・ジョプリン(JOPLIN, Scott 1868-1917)は、南部の黒人一家に生まれ、手に職をつけてと、母が無理して買い与えたピアノを弾き、クラシックの教養を身につけていった。

1897年頃、彼は自らのアフリカの民族的な音楽と、習い憶えたヨーロッパのクラシック音楽とを融合した音楽を作り上げた。それが、ラグタイムとして、世界中に広まって行ったのである。

彼の作り上げたラグタイムは、主にリズムにその特徴があるが、ハーモニーにブルーノート的な響きを取り入れたものもあり、大変興味深い。



1899年に書かれたメープルリーフ・ラグでは、ブルーノートを連想させる音が選ばれていることに留意したいところである。

だがしかし、この方向にはジョプリンは進まなかった。

しかし、シンコペーションを多用したリズムによる音楽は、複雑化し、マンネリズムに陥ったヨーロッパの音楽家たちには、いきなり射して来た朝日のように、強烈に世界を一変させるほどであった。

決して教育機会に恵まれていたとは言えないジョプリンであったが、彼はひたすら努力し、失敗はしたものの、歌劇を書くなど、短い生涯で新しい黒人文化を表現し得た、最初のアメリカ人になった。

次の楽譜は、ストラヴィンスキーの11の楽器のためのラグタイムを作曲者自身がピアノ独奏用に編曲したものの冒頭部分である。



この作品を1918年にストラヴィンスキーは書いた。1916年にディアギレフの主宰するバレエ・リュスのアメリカ公演に指揮者として同行したエルネスト・アンセルメ(1883-1969 スイス)がアメリカで買い込んだ楽譜をストラヴィンスキーやラヴェルに見せたことで、このラグタイムやタンゴ、ジャズというものを知るのである。

この音楽は、その成果であった。

第一次世界大戦の混乱が収まりつつあった頃のヨーロッパで、この音楽は野火のように広がっていった。

ストラヴィンスキーもシンコペーションと単純な伴奏音型という2つの特徴を生かし、更にブルーノート風の音を扱いながら、あくまでストラヴィンスキーのスタイルへとラグタイムを消化し、自分のものになっている。

次の楽譜は、この翌年に書かれた「兵士の物語」(1918)の中の「ラグタイムである。

Ragtime.

24

*mp* *très court* *et p* *sempre sim.*

25

*f* *ben legato* *sf* *très court*

*m.d.* *m.g.* *8vb.*

26

27

ブルー・ノート・スケールは、ジャズの音楽を特徴づけるもので、その歴史を簡単に説明しておく。

元々は、ヨーロッパからアメリカへと渡ってきたダンス・ミュージックが発端だった。

それらは、6音、7音、あるいは時代が下るとさらに9音といった付加音が加えられていた。

オーストリアのウィーンで、レントラーなどの民衆の踊りの音楽をもとにして、ウィンナ・ワルツが生まれたのは19世紀初頭で、それはシューベルトのピアノ作品などでも聞ける。



こうした家庭用の音楽が、すぐにサロンなどでの舞踏などの機会に合わせてアンサンブルで書かれるようになる。

その最初の作曲家と言われるのは、ヨーゼフ・ランナー(LANNER, Joseph 1801-1843)やヨハン・シュトラウス I 世 (STRAUSS, Johann I 1804-1849)であった。

このウィнна・ワルツのメロディーに付加音が紛れ込んだのだった。

1830年頃のヨハン・シュトラウス I 世の作品などにその兆候らしき付加音を使用したメロディーが認められる。ほぼ同じ頃のランナーのワルツ(ワルツ「求婚者」Op.103など)にもそうした音の使い方が聞かれ、比較的初期のウィнна・ワルツでこの付加音は広まっていたことがわかる。

次のメロディーはヨハン・シュトラウス II 世(STRAUSS, Johann II 1825-1899)が1868年に書いた「ウィーンの森の物語」Op,325のメロディーの一部であるが、この付加音の扱いの典型をしめしている。



新酒のワインを飲ませる居酒屋(ホイリゲ)などで広まった音楽が、この付加音のごく初期の典型を示している。



1878年以降、ウィーンのホイリゲで演奏して人気を得ていたシュランメル兄弟の作の「ウィーンはいつもウィーン」という音楽である。

こうして、酒場の音楽にまで、付加音は広まって行った。そしてそれは海を越え、アメリカの社交場、酒場の音楽として輸出された。

南北戦争が終わり、平穏を取り戻しつつあったアメリカで、この音楽は「自由」を得たばかりの黒人たちの音楽にも広まった。

その時、黒人たちのもともとの民族の音と結びついてブギウギ(Boogi Woogie)の音楽となるのであった。

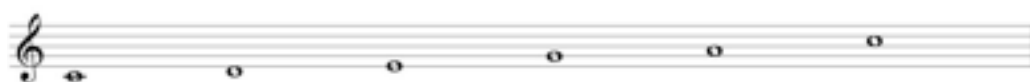
ブギウギは本来ピアノの音楽で、単純なコード・パターンの繰り返しの左手、そして速いパッセージを即興で弾き続ける右手というものである。

この左手のパターンを次にあげておこう。



これはほぼ5音音階(ペントトニック)であるということがすぐにわかるだろう。

ペントトニックのスケールは次のようなものである。



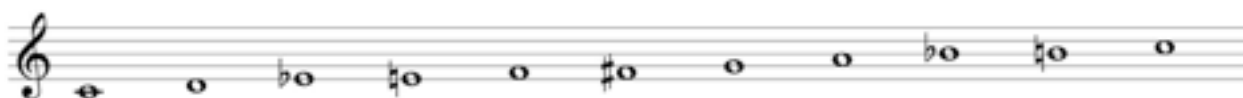
そしてよく似ているが、ラの音が半音上がってシの♭になっているものが現れる。こちらの方が新しいものという確証はないが、それはともかく、次のようなものである。



更にもう1つのパターンもあげておこう。



ここで、レの♯(あるいはミの♭)が出て来る。そしてこれがスケールの中に取り込まれ、また右手の即興でこの音階に従って演奏されることで、次の音階が現れる。



これが、ブルーノート・スケールと呼ばれる、初期のジャズ音楽の特徴となっているものであった。

この3つのパターンは全て同じブルースのコード・パターンで行われる。

彼ら黒人たちがよく知るブルースのコード・パターンを下敷きとして、このブギウギは演奏されていたのである。リズムはシャッフルの三連符で弾むように演奏される。

米国議会図書館の1900年頃のアーカイブ内の音楽のタイトルに”Boogi Woogie”という名前のあるものが3曲ほど存在するのだそうだ。ということは、比較的早い時期からこの音楽が広まっていたようである。

1930年頃からはダンス音楽として、「作曲」されるようになった。楽譜を媒介するものではなかったけれど、次第に様々なジャンルの音楽に浸透していき、今でも時折POPな音楽で聞かれる。

もう一つ、1900年代のアメリカにおいて、席卷したのが、ディキシーランド・ジャズであった。

ジャズの起源とも言われるディキシーランド・ジャズはニューオーリンズで始まったバンドの音楽であった。これが、シカゴやニューヨークへと広まり、このジャズの古典的なスタイルが確立していったものである。

もともとは、白人たちの軍楽隊がやっていたマーチング・バンドを黒人たちが見よう見まねではじめたものだった。だから、行進曲のスタイルがベースとなって、フランスの舞踏のカドリー

ユや、ラグタイムの要素が加わり、やがて、ブルースが加わって今日に伝わるディキシース・ジャズの音楽が完成したのだった。

ピアノ、ギター、バンジョー、ドラムス、コントラバス、あるいはチューバなどのリズム・セクションにトランペット、ホルネット、クラリネットなどが即興演奏を代わる代わる行うのがこのディキシース・ジャズの特徴であるが、かなり曖昧な定義しかなく、音楽の特徴は即興にあり、楽譜でここにあげられるようなものではない。

「聖者が町にやってくる(聖者の行進)」や「ベイズン・ストリート・ブルース」などは誰もが知るメロディーがディキシース・ジャズから生まれてきた。

そしてジャズの巨人、ルイ・アームストロング(愛称：サッチモ)もまた、ここから生まれたのであった。

史上最初のアメリカの作曲家として世界が認めたのがガーシュウィンであろう。アイヴズは知られるようになるのはまだ20年あまり後であったし、ヴァレーズはフランス人だ。

アカデミックな音楽は全てヨーロッパから学んできた音楽の再生産であったと言って、大きく外れたとは言えないだろう。

アメリカ的というのが何なのか、定義するのは難しいが、彼の音楽を聞くと直感的に「これが「アメリカ」だと感じるものがあるのは一体何なのか。

それは彼の出自と、そして1910年代のアメリカの音楽事情とを理解する中で見えてくる。そしてこの極めてアメリカ的な作曲家が、生まれなくてはならない時に生まれ出たのだということが見えてくるし、彼が世の音楽家たちに与えた影響は、私見ではあるが、戦後のビートルズに匹敵するものであったと考える。

## 2) ガーシュウィン

1898年にニューヨーク、ブルックリンにロシア系ユダヤ人の移民の子として、ジョージ・ガーシュウィンが生まれた。

小さい頃は音楽に関心を示さず、悪童として近所で知られた存在だった。

そんな彼が好んだ音楽は、ピアノラから聞こえてくるヴィクター・ハーバートなどの甘ったるいメロディーであり、黒人たちがン層

12才の時、母がジョージの兄、アイラ・ガーシュウィンのために買って与えたピアノを弟のジョージが占有し、瞬く間に上達した。

彼は、音楽学校へは行かなかったけれど、チャールズ・ハンピッツァーという音楽家からピアノ、そしてバッハからドビュッシーなど、当時の最先端の音楽まで幅広く音楽理論を学んでいる。

更に、(映画音楽界で重鎮である)エドワード・キレニーにも学ばせて楽器法からオーケストレーションの基本を学んだ。

彼にとって、当時の黒人の音楽にも親しんでいた彼にとって、バッハもドビュッシーもそしてラグタイムもみんな「良い音楽」であった。これがそのままガーシュウィンの音楽の特徴となったのである。

ニューヨーク、マンハッタンの一隅、28丁目のブロードウェイと、6番街に挟まれた一帯をかつてティン・パン・アレーと呼んでいた。

まだレコードは一般的なものとなっておらず、ラジオもなかった時代、音楽メディアとして楽譜が最大の商品であった時代。このティン・パン・アレーには、楽譜商が軒を連ねていた。

それぞれの店先では、楽譜を買いに来た客に試演して聞かせるピアニストが常駐していた。それが鍋釜をガンガンたたいているような騒々しさだったことからティン・パン・アレー (Tin Pan Alley = 鍋釜小路)と呼ばれていたのだった。そしてそのピアニストにガーシュウインは「就職」したのだった。

新しい音楽を次々と知る機会を得て、彼は作曲もはじめる。そして1918年、20才の時に書いた「スワニー」でヒットを飛ばし、売れっ子作曲家の仲間入りを果たすのであった。

彼はまさに音楽の世界におけるアメリカン・ドリームそのものだった。

彼は、多くの人々が口ずさむ数々の歌を作っただけでなく、管弦楽とジャズを結び付けて、ヨーロッパからの借り物ではない、アメリカ固有の文化をはじめて確立した。

その最初にして最大のヒット作が「ラプソディー・イン・ブルー」であった。

1924年に発表されたこの作品の成立についてはいくつものエピソードがあるが、それはともかく、この曲のもたらしたものについて考えてみたい。

① ラグタイムやディキシランド・ジャズ、あるいはブルース、彼が幼い頃から聞いてきたユダヤの歌などがベースとなっている。

② 極めて自由で即興的な構成で書かれていて、曲のどこをカットをしても自然に繋がる「開かれた形式」によって出来ている。

③ 即興的に書かれたものであり、アドリブを主とするジャズの要素を用いているが、編曲者のグローフェによって徹頭徹尾、楽譜に正確に書かれた音楽である。

これらの要素によって、この音楽は世界中の作曲家たちに一気に受け入れられるものとなった。

曲は次の3つの版が作られた。

#### 1924年版

木管楽器（奏者3）：サクソフォーン、クラリネット、オーボエ、ファゴットを持ち替え

金管楽器：ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ1  
打楽器・その他：チェレスタ、ピアノ（独奏とは別）、独奏ピアノ

弦楽器：ヴァイオリン（奏者8）、バンジョー

#### 1926年版

木管楽器：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、サクソフォーン3（アルト2、テナー1）

金管楽器：ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1  
打楽器・その他：ティンパニ、ベル、銅鑼、小太鼓、シンバル、トライアングル、独奏ピアノ

弦楽器：第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、バンジョー、ギター



1946年版

木管楽器：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、サクソフォーン3（アルト2、テナー1）  
金管楽器：ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1  
打楽器・その他：ティンパニ、ベル、銅鑼、小太鼓、シンバル、トライアングル、独奏ピアノ  
弦楽器：第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、バンジョー

最初の版はポール・ホワイトマンの楽団のために書かれたために、かなり奇妙な編成となっているが、1926年版とガーシュウィン没後に制作された1946年版は、その名残としてバンジョーやギターといった楽器が残っているものの、他は通常の二管編成のオーケストラであり、1946年版でギターが除かれた他は、あまり大きな差異はないものと思われる。

曲はジャズの要素であるブルーノートを使い、技巧的なピアノ独奏が華やかに盛り上げる、実に華麗な作品である。

冒頭のクラリネットのグリッサンドは、作品を委嘱したポール・ホワイトマンのオーケストラのクラリネット奏者がふざけてやってみせたのをガーシュウィンが気に入って書き直したというもの。

その冒頭の部分をピアノ版で。



ただ、この作品のオーケストラ用の編曲は、前述のようにガーシュウィン自身のものではなく、組曲「グランド・キャニオン」などで名高いファーディ・グローフェ(FERDE, Ferde1892-1972)が行ったものであった。

このスタイルは、やがて「パリのアメリカ人」などで、完成を見、更に歌劇「ボギーとベス」において、見事な成果をおさめるのである。

次にその「ボギーとベス」(1933-35)の幕開きで歌われる「サマータイム」のボーカル・スコア。

(Lullaby, with much expression)

CLARA *p* **17** *Moderato* ♩. 96

Sum-mer time \_\_\_\_\_ an' the liv-in' is

*Bells*

*rit.* *pp* *espr.* *R.H.*

*mp poco rit.* *a tempo*

CL *mf* *a tempo*

eas - y, Fish are jump-in', an' the cot-ton is high.

*poco rit.*

**18**

CL Oh yo' dad-dy's rich, an' yo' ma is good-look - in', So

*pp* *R.H.*

CL hush, lit-tle ba-by, don' yo' cry.

*poco animato* *mf espr.*

### 3) ジャズの影響

1920年代から1930年代の所謂、戦間期において、音楽界をガーシュウィンはまさに席卷したと言っても過言ではない。

ついでながら「ラプソディー・イン・ブルー」を委嘱したホワイマンは、その成功に味をしめて、第2回も企画し、アメリカの作曲家ジョージ・アンタイル(ANTHEIL, George 1900-1959)にジャズ・シンフォニーを委嘱し、これは1927年に初演された。

そしてこれがアーロン・コープランドやレナード・バーンスタインへとつながっていくのである。

文化を輸入し続けていた新大陸が、新しい文化を発信し始めた瞬間であった。

彼が確立したスタイルは、多くの作曲家たちに影響を与えた。

ジャズに対してストラヴィンスキーとともに早くから関心を持っていたラヴェルもそのひとりである。

有名なボレロのテーマにも、その影響は明らかである。

次の楽譜はそのボレロの一部である。(ピアノ連弾用の版を使用)

The image displays two systems of musical notation for Maurice Ravel's Bolero, piano duet edition. Each system consists of two staves, numbered 1 and 2. The first system shows the beginning of the piece with a melodic line in the right hand and a rhythmic accompaniment in the left hand. The second system continues the melody and accompaniment.

この他にもラヴェルは、二つのピアノ協奏曲など、明らかにこの新しいアメリカの音楽に対するオマージュらしき作品を数多く残している。

ウィンナ・ワルツへの讃歌として書かれた「ラ・ヴァルス」もまたこのジャズの影響なしに語ることは不可能であろう。



そうした、数多くのジャズの影響を受けたラヴェルの作品の中から、ヴァイオリン・ソナタの第2楽章をあげておく。

彼はこの楽章に「ブルース」というタイトルを与えている。

**II**  
Blues

*Moderato*  
*pp*

**VIOLOIN**

*Moderato* (♩ = 108)

**PIANO**

ラヴェルの次の世代であるダリウス・ミヨーも、積極的にこの新しい音楽を取り入れた作品を書いている。彼は南米に旅行し、ラテン・アメリカの音楽も積極的に取り入れた作品も有名であるが、バレエ音楽「世界の創造」を紹介しておこう。



チェコからパリにやって来ていたボフスラフ・マルティヌー(MARTINŮ, Bohuslav Jan 1890-1959 チェコ→米)の心もこのジャズはとらえた。

ジャズとは、最初、アメリカからやってきた酒場の音楽という意味であった。だから、ストラヴィンスキーにはタンゴがあり、ワルツがあり、ポルカがあつたのである。今日のジャズ概念と多分にずれていることは否めない。

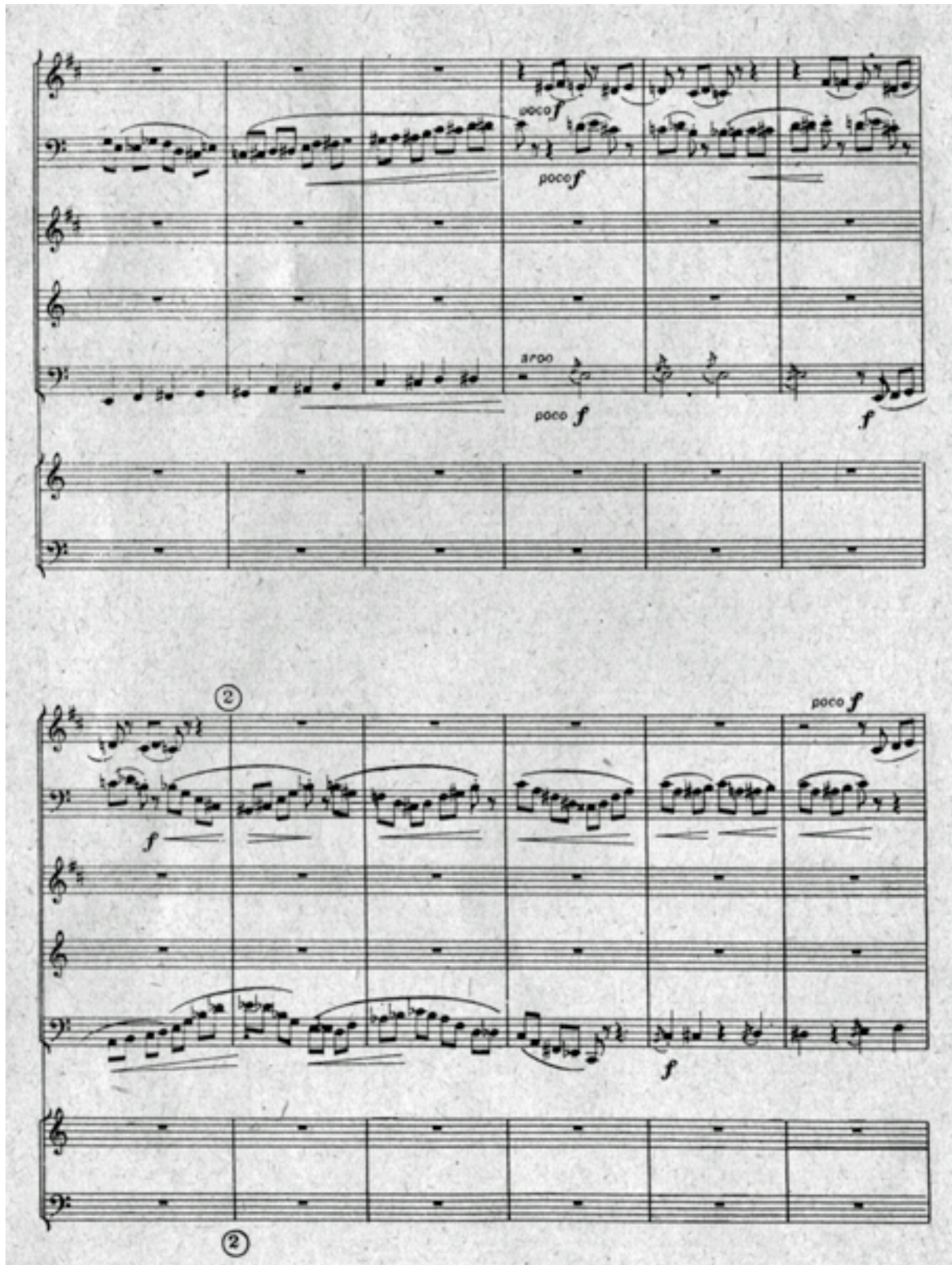
そのマルティヌーがパリ時代に書いた「チャールストン」を。

**III. CHARLESTON**

*Poco a poco allegro*

①

①



こうしたジャズの影響は、意外かも知れないが、ロシアの作曲家たちにも聞かれる。スターリンの時代にあったソビエト・ジャズ委員会に所属していたドミトリ・ショスタコーヴィチ (SHOSTAKOVICH, Dmitry 1906-1975)がジャズの要素を取り入れた作品を書いている。

(東京外国語大学 現代音楽作曲論 講義用資料より)